曲がり角の男女共同参画社会
―新たな一歩への道程―

渡辺美恵
NPO法人生活企画ジェフリー

ひとりの声を大切に――NPO法人設立

「いい妻」として夫を立てれば立てるほど夫はますます古い男になってしまい、「いい母」として子どもに手をかければかけるほど子どもは自立しなくなり、「いい嫁」として義父母に尽くせば尽くすほど義父母は無理を言い、「いい娘」として実父母を慈しめば慈しむほど実父母は依存するばかり。そんなバカな…と思われるかもしれないが、女性がどんなに家事に精を出しても、それに対する家族の対応はまことに冷ややかであった。

これは、私が実施した調査（東京女性財団助成研究事業「女性の病と家族の意識調査」）からみえてきたうれしくない状況である。しかし、心配にはおよばない。

愛されていると思っていたのに、実は甘えられていただけだったのかと気づきはじめた女性たちは、新しい生き方を探しだしている。心配なのはむしろ、妻のこころを聴こうとしない夫のほうである。

ちなみに、男性の多くは三つの勘違いをしているのではないだろうか。

一つ目は、女性は家事が好き、または得意だと思っていること。二つ目は、自分の親は妻が看てくれるだろうということ。三つ目は、妻は丈夫で長生きするだろうという思い込みである。

それに対し、妻たちは、「私は家事マシーンじゃない、サイボーグじゃない、家政婦じゃない」と窮状を訴えていたが、その声を夫や家族に伝えていない。なぜなら彼女たちは疲れ、あきらめてしまっていたのである。

これではいけない。「女性たちのくすぶり」を徹底的にアピールすることで、男尊女尊時代の推進に一役買いたいと、今年（二〇〇四年）四月、「NPO法人生活企画ジェフリー」を立ち上げた。設立に先立ち、理事には夫たちの参加を促した。なぜなら、男女平等参画の理念を「女のエゴ」と傍観してほしくなかったと同時に、地

域社会への参画は彼らの人生をもきっと楽しくさせるものであると確信していたからである。案の定、彼らは持っている力をいかんなく発揮し、まさに男女共同参画の運営がはじまった。

月に一回開かれる「ジェフリーの家で〝しゃべり場〟」は、男女の自由な語り合い、聴き合いの場である。愚痴をこぼし、嘆きながらも、ひとりではない開放感と充実感が明日のエネルギーを生んでいる。「自分の意見が堂々と言える場所ができた、うれしい」というのは八〇歳のOさん。

ここで、心していることが一つある。それは、参加者の悩みを個別・特殊な話と解釈せず、できうる限り、白書や各種資料をもとにその背景に潜む社会的な状況を語り合うことである。

女性の人権と社会の動き

「世界の総人口の二分の一を占める女性は、総労働時間の三分の二働き、総所得の一〇分の一を得、総資産の一〇〇分の一以下しか所有せず、その結果決定の場にはほとんど参加していない」。女性差別の実態を国連はこう表現しているが、さかのぼれば、国連憲章でも性による差別撤廃は明記されていた。

あれから六〇年。差別や偏見はなくなっただろうか、世界は平和になっただろうか。答えはノーである。女たちに厳しい社会は、洋の東西を問わず存在しており、身近な日本社会における政治家諸氏の発言にも驚くばかりである。人権意識欠落を恥じるどころか女性蔑視を正当化する心根に、私は哀れさえ感じる。Sさんいわく、「女をないがしろにして、どこがおもしろいのかね～」。

新たな一歩へ

男女共同参画社会基本法成立以来、女性問題を解決すべく、多くの行政は相談窓口を設け、男女平等情報誌やフォーラム開催等、意識啓発を活発に行っているが、その動きに当初の輝きがみえないことを残念に思っている。しかし、二一世紀の最重要課題とうたわれた男女共同参画社会の実現はこれからが本番。なお一層の工夫と努力を重ねたいものである。

それには何よりもネットワークが必要である。より多くの人びとから知恵をいただき、励ましあい、助け合っていかねばと思う。そして、企画力・伝達力にももう一つ工夫が必要な時代がきたのではないか。まずは、とかくお仕着せと捉えられがちだった従来の手法を見直さねばならない。男女共同参画社会はいま曲がり角にきている。その危機感をもって、柔軟かつ発想豊かに新しい手法を駆使しながら、共感者を増やしていこう。

NPOの出番である。行政との協働には、信頼と対等と専門性をもって望みたい。

（わたなべ　みえ）